

親鸞『讚阿弥陀仏偈和讃』と

——一遍『別願和讃』の語り口について——

広小路直人

中世和讃を代表するといわれているのが、親鸞(一一七三—一二六二)による真宗の和讃と、一遍(一二三九—一二八九)らによる時衆の和讃である。ともに浄土教系の和讃であるが、それなりに性格を異にする面がある。この報告では、曇鸞『讚阿弥陀仏偈』をもとにし、親鸞作の和讃の中では初期のものと考えられる『讚阿弥陀仏偈和讃』(『浄土和讃』冒頭に位置する)と、現存しているもので一遍作と考えられている『別願和讃』を取り上げる。そしてこれらにおける文体や視点など、それぞれ個別の語り口について考察したい。

まず親鸞の『讚阿弥陀仏偈和讃』を、原拠である曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』と表現面において比較してみる。細かく見ていけば様々論じられそうであるが、二点に注目しておく。

第一点は、『讚阿弥陀仏偈』に出てくる「我」という言葉が、『讚阿弥陀仏偈和讃』には相当する言葉が出てこないことである。『讚阿弥陀仏偈』一首目の偈には、「現在西方去此界 十萬億刹安樂土 佛世尊號阿彌陀 我願往生歸命禮」とある。また後にも二二カ所「我」が出てくる。これらの「我」は作者曇鸞と考えられるので、全体を通して作者曇鸞が、自らの視点で阿弥陀仏や浄土を讃嘆しているといつてよいだろう。一方『讚阿弥陀仏偈和讃』の場合、「我」やそれに相当する言葉はなく、先に挙げた一

首目の偈にも直接対応した和讃はない。「愚禿親鸞作」とあるのが作者は親鸞であるが、和讃の中において誰が誰の視点で語っているのかははっきりしない。少なくとも作者が直接現れてはいない。その視点を強いていうなら、作者・受け手を含む存在を客体化・対象化する外在化した視点となるだろう。

もう一点は、直喩表現など具体的な描写(特に視覚的・空間的な表現)の減少である。このことは親鸞の他の著作においても指摘されている。ここでの例を一、二挙げてみる。『讚阿弥陀仏偈』一七首目「安樂國土諸聲聞 皆光一尋若流星 菩薩光輪四千里 若秋滿月映紫金 集佛法藏爲衆生 故我頂禮大心海」は、『讚阿弥陀仏偈和讃』一六「十方衆生のためにとて 如来の法蔵あつめてぞ 本願弘誓に帰せしむる 大心海を帰命せよ」の原偈といえるが、表現面に注目すると、具体的に描写する表現は削られていることがわかる。また一八句にわたって仏土を具体的に表現している『讚阿弥陀仏偈』四二首目の偈をもとにした和讃はない。『讚阿弥陀仏偈』は七言を一句として四句から二六句を続けて一つの偈とするのに対し、『讚阿弥陀仏偈和讃』は七五調のすべて四句で一つの和讃となっている。よって量的に削り取られる情報があるのは仕方ないといえる。しかし『讚阿弥陀仏偈』二四番目の偈は三つの和讃で取り上げていることなどを見るに、物理的な制約だけではなく作者の意図がはたらいっていると考えらる。

一遍の『別願和讃』についても、前に述べた二点に関してふれておきたい。

『別願和讃』は誰が誰の視点で語っているのかといえば、それは作者一遍であろう。『別願和讃』は「身を觀ずれば水のあはきえぬるのちは人ぞなき 命をおもへば月のかげ いでいるいき

にぞとまらぬ」と始まる。「身」という言葉は肉体という意味だけでなく、社会的立場や生命、そしてその人自身といった多義的な意味を包含している。「我」に相当する言葉はなくとも、作者一遍が自らの視点で語っていると考えられる。この一人称的な語りが必ずしも全体を貫いているとはいえないが、『讚阿弥陀仏偈和讃』とは違い、作者一遍がこの和讃の語り直接現れているといえる。また『一遍聖絵』の『別願和讃』直前には「松原とて八幡大菩薩の御垂跡の地のありけるにて念仏の和讃を作て時衆にあたえたまひけり」とある。これを含めた文脈で考えると、作者一遍が『別願和讃』の直接語り主体であり、人々もまたそのように認識していたと考えられる。

具体的な描写という点についてはどうであろうか。一遍の和讃はわかりやすい言葉が使われているといわれる。ただ、漢語や仏教的な用語の分量で親鸞の和讃と際違った差があるわけではない。しかし、「はづかしき」「おしむ」といった身近な心情を表す言葉や、「眼」「耳」「香」「味」など肉体的感覚と関わる言葉を媒介として、距離感を感じさせない。また、最後に来迎の様子を視覚的に示して締めくくる構図も、受け手により具体的に分かりやすい印象を与えることになろう。

以上、作者自身の視点が前面に現れているかどうかという点と、具体的にあり人々の感覚に共有されやすい言葉が用いられているかどうかという点で、表現上の違いが認められる。

一般に送り手が自らの視点で語るものは、受け手が自らに重ね合わせやすく受容されやすいものである。加えて受け手に共有されやすい日常感覚に訴えかける言葉をちりばめたものであるなら、それは相乗効果となつていつそう受け入れられやすいとい

える。和讃のように受け手が自ら歌うようなものは、受け手自身が受け手の視点で歌うことになろう。その一方で、表現されているものが問題意識を持たれることなくそのまま受容されていく面もある。受け手に発想の転換を促すようなものを意図するなら、それに応じた表現が必要となろう。

阿弥陀仏からの「信」ということを説く親鸞にとって、背後にある思想を正確に伝えるためには、受け手が自らの思考の枠組みで理解するようなものではなく、むしろ先入観を修正するようなものでなくてはならなかったといえるだろう。個人的な体験や感動の伝達よりそれらを越えたものに気づくことが大切であるから、安易に共感するものではその役割を果たせないといえる。それに對し、信不信を問わないと言い、「口にまかせて唱れば、声に生死の罪きえぬ」と歌う一遍の立場においては、心情の吐露によってもたらされる感覚の共有が重要だったといえる。そのままできたと説くのであれば、ことさら「他者」を意識させたり、引っかけたり考えたりする言葉を使うような表現は、必要なかったのだと考えられる。